

存在様態のシテイルについて —格体制の変更から—

江 宛 軒*

1. 研究の背景・動機

シテイル形式を動詞のアスペクト的形式として研究するのにおいて、奥田(1977)以来、主に「動作継続」と「結果継続」という二つのアスペクトの意味に基づき、シテイル形式が表す意味に関して、様々なバリエーションが提出されている。

その一方、野村(2003)には、シテイル文は実は存在文の一種に属している、という観点からシテイル形式を捉え、全体述語としてのシテイル形式は存在詞的な側面を持っている¹と指摘されている。

野村(2003)をふまえて、福嶋(2004)には以下のような現象を提出することにより、野村氏の説に、実例による証拠を加えた。シテイル形式の研究に、新たなアプローチを示している²。

(1)* 池に鯉が泳いだ。／○ 池に鯉が泳いで
いる。 [動作継続]

(2)* 庭に犬が死んだ。／○ 庭に犬が死んで
いる。 [結果継続]

動詞をシテイル形式に変えたことによって、動詞の格体制にない二格句を、新たに出現させている。このように、新たに「場所」二格句を出現させているシテイル形式を、福嶋(2004)は「格体制を変更させている～テイル」³と呼んでいる。

福嶋(2004)の調査によると、シテイル形式による格体制を変更させる現象は、シテイル形式のアスペクトの意味が、動作継続と結果継続と両方

意味している場合とも出現しており、今までのアスペクト研究観点では、出現させる条件として解釈できない。そして語順の「N1ニN2ガVテイル」という傾向から、「格体制を変更させている～テイル」現象のある文は、いわゆる存在文と一致し、そこからこういうシテイル文は、実は野村氏が提出した、「存在様態を表すシテイル文」と同じようなものではないかと、福嶋の指摘であった。

ところが、こういう「存在様態を表すシテイル文」を、福嶋が提示した「N1ニN2ガVテイル」に沿って、ガ格の名詞と二格の名詞と、以下のように変えると不自然になる。

(3)○ 池に鯉が泳いでいる。

(4)* プールに子供が泳いでいる。

例(4)は、福嶋(2004)のいう存在様態文の語順とは同じだが、不自然な文となる。そこは福嶋(2004)の語順だけではうまく説明できない。

故に、ここでは「存在様態を表すシテイル文」における、二格の名詞N1と、ガ格の名詞N2との間の制約、そして「存在様態を表すシテイル文」の性質による文の捉え方から説明を加えたい。

それに、本発表ではより「格体制を変更させている～テイル」現象を実例で観察するために、改めて他のデータベースで考察し、「格体制を変更させている～テイル」現象について改めて考えてみたい。

*台湾大学修士2年

2. 先行研究

2.1 野村（2003）の「存在様態のシテイル」

野村（2003）はあらゆる現代日本語の文を、その内容に応じて存在文、動詞文、

形容詞文の三種類に分けている。従来の研究観点から見ると、「動詞文」は、主に「動作」に着目している文であり、「動作の主体」の存在が無視されがちである。が、主体が存在しないわけではないので、「存在を含意する」文に属している。

「動詞文は実は存在を含意する文」という概念を踏まえて、野村（2003）には、以下のシテイル文に対して解釈した。

(5) テーブルの上にリンゴが転がっている⁴。

(6) 裏庭に人が立っている⁵。

野村（2003）の観点から討論すると、例(5)(6)は主体の状態だけではなく、主体の存在も表している、一種の「存在様態を表すシテイル文」である。つまりこのような「存在様態を表すシテイル文」は、「主体はどのようにある（存在している）か」まで表す存在文である。

ここで注目をおきたいのは、野村（2003）に提示されたシテイル文の存在様態性は、シテイル形式に新しいアスペクト的意味を加えるのではなく、従来のアスペクト観点を認めた上で、ほかの側面からシテイル文を観察するものである。

以上の野村氏の観点に従って、次の例文を眺めたい。

(7) 橋の下に川が流れている⁶。

従来のアスペクトの観点から見ると、例(7)のシテイル形式は「動作継続」に属しており、これが動作継続の動態面と考えられる。但し、前後の文脈または場面から考えると、むしろここでは「橋の下に川がある」という意味で使われていることが多いと推測できるであろう。

野村（2003）によると、存在様態性が認められる動作継続文には、次の特徴がある⁷。

a アル・イルに置き換えて文意が通ずること

b 二格で場所が表されること

c 動作本来の活動性が認められないこと。

中に特に条件cは、まさにシテイル形式の「存在様態」性を討論する際のポイントと言えよう。つまり、野村（2003）に言及された「存在様態を表す動作継続文」は、「動作進行」の動態面と、「存在」を表す静態面という、二つの側面がある。ところが野村のシテイル形式の「存在様態」というのは、新たなシテイル形式の意味を提出のではなく、従来のシテイル形式における（「動作進行」の動態面の）アスペクト的な意味を認めた上で、「存在様態」の側面からシテイル形式を考えるものとされる。

2.2 福嶋（2004）の考察

福嶋（2004）には、以下の文を通して、こういう格体制変更の現象を発見した。

(8) a *池に鯉が泳いだ。

b 池に鯉が泳いでいる⁸。 [動作継続]

(9) a *庭に犬が死んだ。

b 庭に犬が死んでいる⁹。 [結果継続]

(8)a、(9)aが現代日本語として不自然な文であるが、(8)b、(9)bのように動詞をシテイル形式にすると、かなり自然な文となった。さらに以下の文と比べたい。

(10) a 椅子に健が座った。

b 椅子に健が座っている¹⁰。

例文(10)のa、b両方とも自然な文である理由は、「座る」という動詞自体が格体制として、二格が要求されているからである。それに対して、例文(8)(9)の「泳ぐ」「死ぬ」は二格が要求されていない動詞である。にもかかわらず、シテイル形式にすることにより、二格に対する許容度が上がり、自然な文となった。つまり、シテイル形式で動詞の格体制を変更させ、文の許容度を上げさせるということになっている。福嶋（2004）はそういう格体制を変更させるシテイル形式を、「格体制を変更させている～テイル」と呼んでいる。例文(8)と(9)が示したように、「格体制を変更させている

～テイル」の現象は、動作継続にも結果継続にも生じた現象であり、動作継続と結果継続の区別が、格体制変更の現象の原因とすることができない。

そして福嶋（2004）の調査結果によると、「格体制を変更させている～テイル」文には、「～ガ～ニ～テイル」の語順より、「～ニ～ガ～テイル」の方が圧倒的に多いことを示した。福嶋氏はその「～ニ～ガ～テイル」の語順の傾向は存在文の傾向と一致することと指摘されている。

しかしながら、福嶋（2004）はこの問題について、主に文の語順に注目を当てている。そこで、もしかして格体制の変更の現象を解明するために、その現象に要求された格助詞「に」、そして野村（2003）が提示した存在様態文の「静態面」との関連性も含めて、更なる議論が必要になるのではないと思われる。

故に、本発表は「格体制を変更させている～テイル」の格体制変更の現象を考えるために、格助詞「に」のプロトタイプ的意味と、野村（2003）の存在様態文の「静態面」という二つの観点から、格体制の変更の現象について討論を行いたい。

3. 分析

3.1 存在様態を表すシテイル文における静的な側面

格体制の変更の現象を分析するには、まずは格助詞「に」のプロトタイプ的意味から説明していきたい。

森山（2008）には、日本語の格助詞二格は、動作のプロセスを把握する「移動先」、「動作の相手」を表す用法、つまり与格の用法、そしてそれ以外に、あるモノの「存在の位置」や「時点」、「経験主」を表す用法など、「存在論的な用法」も発達しているという。「存在の位置」や「時点」、「経験主」を表す用法はどれもガ格で表された参与者の空間的、時間的、心的な「位置」を表し、位置づけら

れる存在とその位置といった「対峙性」を有している¹¹。概ねに言うと、動力連鎖や移動というプロセスを扱う「プロセス的用法」と、存在的事態というプロセスを扱う「存在論的用法」と二種類に分けられる。「庭に犬が居る。」¹²という存在文は、まさに「存在論的用法」に属している。「存在論的用法」の場合、動作のプロセスが含まれず、また背景化されるため、二格はプロセス性を持たないとされる。なおガ格に対する「対峙性」は静的（心的）なものである¹³。つまりガ格が「位置づけられるもの」を表すのに対して、二格が「位置づける」場所を表している。両者の間では「静的な対峙性」を成している。

要するに、認知言語学の立場から「庭に犬が居る。」という存在文を分析するにあたり、話し手はガ格で存在の主体を表し、二格で存在の位置を表しており、すなわち、文全体を「静止的に」捉えるわけである。

以上の森山氏の概念を踏まえて、福嶋（2004）の「格体制を変更させている～テイル」の格体制変更の現象について考えるために、次の例を見られたい。

(11) 池に鯉が泳いでいる。

(12)* 池で鯉が泳いでいる。

動詞「泳ぐ」は、もともとデ格、ヲ格を要求している動詞であり、「池で鯉が泳いでいる」は文法的に正しい文になるはずである。但し、そこでデ格に置き換えると不自然な表現となった原因は、恐らく話し手が「鯉が池で泳いでいる。」という動的な意味より、「池に鯉がいる。」という静止的な意味を先行させたいゆえであろう。つまり、話し手は「池に鯉が泳いでいる。」の二格の働きによって、「存在」という静止的な事態を表している。「池に鯉が泳いでいる。」という例文が話し手の認知の中には、動作継続文より、存在文に近いということである。それはまさに、野村（2003）に提示された「存在様態を表すシテイル文」の解釈と合致している。本来「動作進行」の動態面と

「存在」を表す静態面という二つの側面が含まれているが、二格の働きによって、「動作進行」の動態面を背景化させ、「存在」の静態面を前景化させた。

3.2 「N1ニN2ガVテイル」におけるN1とN2との制約

福嶋(2004)には、「存在様態を表すシテイル文」の「N1ニN2ガVテイル」という語順に焦点をあて、「N1ニN2ガVテイル」の語順の傾向が存在文の傾向と一致するということによって、シテイル文は、野村氏の提出した、「存在様態を表すシテイル文」と同じようなものではないかと指摘した。

しかし、福嶋のいう「N1ニN2ガVテイル」の語順で、ガ格の名詞と二格の名詞を、例えば、次のように変えると、不自然な文になる。

(13) 池に鯉が泳いでいる。

(14)* プールに子供が泳いでいる。

例(14)は、福嶋(2004)の語順と同じような例文ではあるが、二格の名詞N1と、ガ格の名詞N2を、それぞれ「プール」と「子供」に変えると、不自然な文になる。それは、福嶋(2004)の語順の傾向という説明のみでは、うまく解釈できないということは明らかであろう。

例(14)が不自然な文になる理由については、野村(2003)が提示した存在様態文の「静態面」との関連性を踏まえて説明したい。既に前で述べたように、存在様態を表すシテイル文は、話し手の認識から「静止的事態」として捉えられる。以下、これを前提として議論を行いたい。

まずは「プールに子供が泳いでいる。」という文が示した場面について眺めてみたい。「プールに子供が泳いでいる。」という文を聞いた際に、聞き手の頭の中に浮かんできた場面は、恐らく「子供がプールに浮いている(あまり動いていない)」という、「静止的な場面」に近いであろう。ところが、我々は普通、「池に鯉が泳いでいる」と同じように、子供を、そんな「プールに浮

いている」といった静止的な場面に存在させることを考えるのはまずないであろう。それはなぜかという、N1の「プール」というのは、N2の「子供」の普段の存在場所としては不合理だからである。つまり、子供は普段プールに「居る」わけではなく、泳ぐときだけ、プールの中におり、即ちプールの中では「泳ぐ」だけである。

このことから考えると、N1はN2が普通の存在できる場所でないといけなわけである。

言い換えると、「N2はN1に存在する」ということの合理性はまず認められなければならない。そして、風景描写のように、N2はN1に静止的に近い状態で居ることはできないといけな。

これを踏まえ、さらに以下の例文をもって、N1、N2の制約について、より説明できると思われるよう。

(15)* 山頂に後輩がうろついている。

例(14)と同じように、聞き手がこの例(15)に不自然を感じるの、まず、例(15)は「風景的、静止的な描写」と見られることはないであろう。また、N1の「山頂」も、N2の「後輩」の普段の存在場所として考えられず、後輩は普段山頂に存在する(居る)わけではなく、恐らく登山といった特殊な目的のためにだけ山頂に行くことがあるであろう。というわけで、例(15)からも、存在様態を表す「N1ニN2ガVテイル」構文においては、N1はN2が普通の存在できる場所でないといけなという制約がかかる、とわかる。

ちなみに、次の例も見られたい。

(16)* 572号室に窓が開いている¹⁴。

例(16)は結果継続文なので、静止的に結果存続の状態を描写しているという点により、その静態性には問題がない。が、存在様態文として捉えることができ、「572号室に窓が開いている」と言っても差し支えがないはずであるが、例(16)は不自然に感じられるのである。それはなぜなのか、やはりN1、N2の制約に係わると考えられる。窓はそもそも572号室の一部で、普通は「572号室に窓が開

いている。」というより、「572号室の窓が開いている。」と言った方が、遥かに自然であろう。つまり、N1「572号室」はN2「窓」の普段存在する場所というのではなく、N2「窓」はN1「572号室」の一部なのである。言わば、この例の非文法性は、N1はN2が普通の存在できる場所でないといけない、というN1、N2の制約に反していることに起因するのであろう。

以上述べたように、格体制変更の現象が起きた際に、該当存在様態文「N1ニN2ガVテイル」に、N1はN2が普通に存在できる場所であるという制約がある、ということが明らかにできた。

3.3 まとめ

ここでは、前述した「格体制を変更させている～テイル」の格体制変更の現象が起きる条件をまとめてみたい。

格体制の変更の現象が起きる際に、以下の三つの条件をそろえなければならない：

- ① 話し手は文全体を「静的事態」として捉えられる。
- ② 二格は存在場所を表し、その二格によって「存在様態を表すシテイル文」の「存在」という「静止面」が引き出される。そしてシテイル形式で主体の様態を表す。
- ③ N1はN2が普通に存在できる場所である。

以上の三つの条件が「存在様態を表すシテイル文」の基本とも言えよう。三つの条件それぞれ不可欠であり、それに連続的に生起する場合が多い。そして文脈からも説明できる場合もないとは言えない。ゆえに、より長い文脈で観察してほしい。

今回はBCCWJの文字検索データベースを使用し、事例収集を行った。以下には代表的な一例を引き出して、上に述べた条件と照らして分析していきたい。

(17) 谷中のネコは太りぎみまずは「ネコ好きの聖地」と呼ばれる、東京の下町・谷中に行ってみた。なぜ聖地なのかというと・夏目漱石が『我輩は猫である』を書いた家があるから・

本物のネコもいる猫グッズ専門店「ねんねこ堂」があるから。しかしなんととっても一番の理由は・町にネコがうろついているからだろう。谷中にいると、どこかの飼いネコの散歩によく出くわす。ネコを飼うにも、散歩に出すにもいい環境なんだろう

(大塚幸代『大人の自由研究』)

上の例(17)から見えるように、波線と下線部の例文は「存在様態を表すシテイル文」である。「ネコがうろついている」の部分だけ見ると普通の動作継続文であるが、二格によって「ネコ」の存在場所が提示されたことにつれ、風景の描写として文の「静止的な側面」が引き出される。つまりそこを「町にネコがいる」と言い換えても、差し支えがない、自然な文脈を成す。そして「ネコ(N2)は町(N1)に存在する」と言ってもかなり合理的である。

ほかのBCCWJの資料からにも、数多くの「存在様態を表すシテイル文」を収集した。

(18) 短かく刈られた緑の芝生の上に、頭のとっぺんの赤い鶴が歩いている。かんがえごとをしなが、かなり広い池の縁を歩き、裏門から外へ出る。(吉行淳之介『一病息災』)

(19) 二はいもお茶をもらった。同じ床几に、供をつれた田舎侍が休んでいたが、「ねえさん、酒はいかほどかな」「はいはい、三十二文でございます。」(池田みち子『池田みち子の東海道中膝栗毛』)

(20) 「まだおかみにならない時分、子供が川を見るのが大好きで、浅瀬に小さいお魚が泳いでいるのを見に行きますと、源太さんがいましよ。」(梅本育子『桃色月夜』)

(21) 「なんかおかしいと思ってあちこち見てまわり、台所に一步入ったら床に猫が死んでた!ところで、絶対に壁際を歩いちゃいけないよ。地の底で音がするのが聞こえる。」

(残雪『黄泥街』)

(22) 清流が緑の木々に包まれた山々の間を縫う

ように流れ、空にはきつと気の早いアキアカネが飛んでいることだろう。（伊藤暢彦『ただいま奇跡のまっさいちゅう』）

これらの例文前後の文脈を推測してみると、多くは風景の描写であり、例（17）の状況に近い。「静止的な事態」として捉えられていることが目立っている。

4. 結び—今後の課題

今回は理論に沿って、福嶋（2004）が提示した「格体制を変更させている～テイル」の格体制変更の現象について議論した。但し時間のゆえで、実例データに関する考察はまだ十分とは言えない。今後はさらに用例を収集して、文脈、または場面分析を行いたい。

それに、今回は主に「動作継続」のシテイル文に焦点をあて、今後は「結果継続」のシテイル文に対しても、実例と対照して検証を行いたい。

さらに、今回の資料が示したように、格体制変更の現象は場面ごと、そして文脈ごとでの分析が必要であるにより、かなり語用的な一面を表していると思われる。今後は語用論の視点も視野に入れて、格体制変更の現象にアプローチしていきたい。

参考資料

1. 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』ひつじ書房
2. 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』72巻第8号 京都大学pp1-20
3. 福嶋健伸（2004）「動詞の格体制と～テイルについて—小説のデータを用いた二格句の分析」『現代日本語文法現象と理論のインタラクション』ひつじ書房pp99-123
4. 福嶋健伸（2005）「無いはずの二格句が有る不思議—格体制と～テイル—」『國文學 解釈と教材の研究』51巻第4号 學燈社pp32-34
5. 国立国語研究所「中納言」コーパス<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>

6. 国立国語研究所「中納言」コーパス<https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>

注

- 1 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」頁4
- 2 福嶋健伸（2004）「動詞の格体制と～テイルについて—小説のデータを用いた二格句の分析」頁99
- 3 福嶋健伸（2004）「動詞の格体制と～テイルについて—小説のデータを用いた二格句の分析」頁100
- 4 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」頁3
- 5 同註5。
- 6 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」頁5
- 7 野村剛史（2003）「存在の様態—シテイルについて—」頁5
- 8 福嶋健伸（2005）「無いはずの二格句が有る不思議—格体制と～テイル—」頁32
- 9 同註9。
- 10 同註9。
- 11 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』頁49
- 12 例文は森山新（2008）pp126からの引用。
- 13 森山新（2008）『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得—日本語教育に生かすために—』頁125
- 14 福嶋健伸（2004）「動詞の格体制と～テイルについて—小説のデータを用いた二格句の分析」頁116